

新潟県岩船郡山北町大毎の盆踊り

飯島 一彦

Folklore of “*Bon-Odori*” songs as expressions of a community at
Ogoto town, Sanpoku city, Iwafune county, Niigata prefecture

IJIMA Kazuhiko

獨協大学外国語学部言語文化学科

マテシス・ユニヴェルサリス 第4巻 第2号

2003年3月20日 発行

Mathesis Universalis Volume4, No.2

Department of Language and Culture, Faculty of Foreign Languages,

Dokkyo University, Japan

March 2003

新潟県岩船郡山北町大毎の盆踊り

飯島 一彦

平成六年八月一五日、新潟県岩船郡山北町大毎^{おおご}へ出掛けた。この目昔ながらの盆踊りが行われると聞いていたからだ。

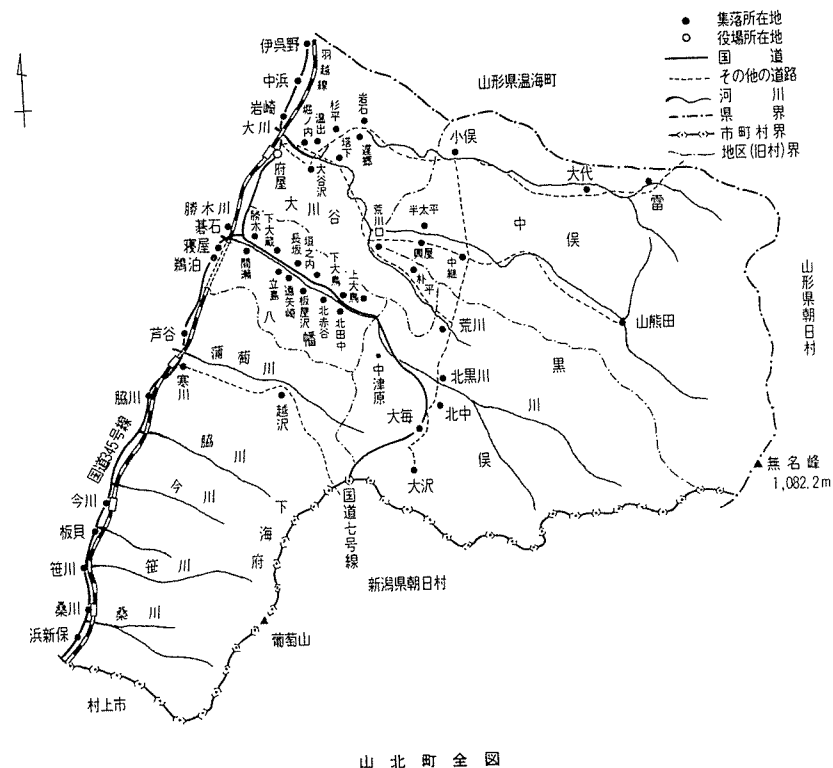
※ 山北町は新潟県の最北端に位置し、北は山形県温海町、東は同朝日村、南は新潟県朝日村及び村上市に接している。西に日本海に向かってやや開けているが、それ以外の三方は標高五〇〇〜一〇〇〇メートルに及ぶ深い山塊に囲まれており、町全体が山がちで、平野と呼べる地区はほとんどない。ほぼ東へ向かって傾斜を急に高めていく地勢は、朝日連峰によって阻まれ、山形県朝日村と接するとはいえ、東西の交流はまったく言っていない。東部最奥の雷^{いかづち}・山熊田という集落は、県内の山村の中でも著名だった地区で、冬季は現在でも通行には注意が必要な豪雪地帯である（地図参照）。訪問当時人口約八五〇〇人、世帯数約二五〇〇、面積約二八四平方キロメートル、四八の集落が散在する典型的な過疎の村々であった。

東から西へ注ぐ何本もの河川に沿って、狭い耕地が形作られている。米自体の生産量は少ないが、冷涼な山間地で生産されるコシヒカリは、魚沼産のものよりさらにおいしいことで一部に知られる。ほとんど他地区に出荷されることがなく、一般には知名度がないが、町の中心地である府屋の民宿でいただいた大毎の米で炊い

大毎の盆踊り歌 (5775形式の時)



大毎の盆踊り歌 (近世調形式の時)



山 北 町 全 図

地図 『山北町民俗論集』第3集(山北町教育委員会、平成五年二月)より転載

委員会」と済ませているごとく、民俗歌謡・民俗芸能の項がほとんど抜け落ちていた。しかし実際には平成五、六年に数度の探訪調査を試みたことによって、この地区に豊富な民俗歌謡が伝承されているのが判明したのである。^(注1)

その中でもことに特徴的なのは、この地域では田植歌はまったく聞くことが出来ないのに、かつて「田小切り」(田起こしをした後に、水を張った水田で前年の稲株を鋳で崩していくという、宮城・岩手・山形など東北地方各県に分布していた田仕事)という単調な作業に伴って「田小切り歌」が盛んに歌われた地域があったということであ

たご飯は、確かに現在の記憶の中でも一番うまい米であった。この地域は筑波大学の「さんぽく研究会」によって、昭和五十年代から十五年の長きに亘ってすでに詳細な民俗調査が行われており、その結果は『山北町の民俗』1~5(山北町教育委員会、昭和六十一年(平成元年))として刊行されているのは著名である。だが、その報告には調査者みずから「山北町の民謡についてはすでに、新潟県教育委員会から昭和六一年に『新潟県の民謡』と題された報告書が刊行されている。」(矢野敬一「ふるさとの唄の誕生—唄とその時代—」、『山北町民俗論集』第3集所収、平成5年、山北町教育

った。しかもその歌に二種類が存在し、一つは掛け声に近い、リズムミクかな囃しに面白おかしい歌詞を載せたのみのものと、大変美しい旋律を持つものがあるのである。後者は実は地域の盆歌（地元の呼称、盆踊りに伴う歌）の転用なのであった。^(注2)

大毎の盆踊りに出掛けたのは、結局それ確かめに行ったのである。

大毎の集落の中には幅二メートルほどの旧出羽街道が通っている。芭蕉が『奥の細道』で辿った道だ。この道は、集落の入口から意外な急勾配でまっすぐ峠に向かって登っている。その二キロほど南奥は、峠下の大沢の集落になる。大沢には古い建物が残っている。江戸時代から明治時代中期までの旅人達が足を休めたところだ。

大毎の街並みは、その後明治時代になって開かれた旧国道七号線に沿って細長く連なっているが、昔の面影を色濃く残しており、道幅も狭く家並みも建て込んでいて、外からやってきたものが自動車を置く場所はありそうもない。現在は集落の上を通っている国道七号線の広いバイパスの脇に駐車して、集落へ降りていった。

この辺りでは山間部で起伏の激しい出羽街道を、かつて人は徒歩や馬で往還した。海岸沿いは地形が厳しく街道になり得なかったからだ。近代政府はその道を大毎から北に出た辺りから西にねじ曲げ、府屋から海沿いに鼠ヶ関を通り、鶴岡・酒田の庄内地方へ抜ける国道とした。その頃は大毎もまだ賑わっていたのだろうが、交通量の増加に伴い、立派なバイパスが古い街並みを避けて通りすぎることになって、集落のたたずまいはひっそりとしたのだ。

暑い。とにかく暑い。去年がとても寒い夏で、米も全国的に凶作だったその翌年が、今度は水不足が心配される猛暑だというのだから、自然というのはわからない。

幸い目に入る限りの田圃の稲は順調に育っているようである。大毎は山北町の中でも一番南に位置し、明神峠を

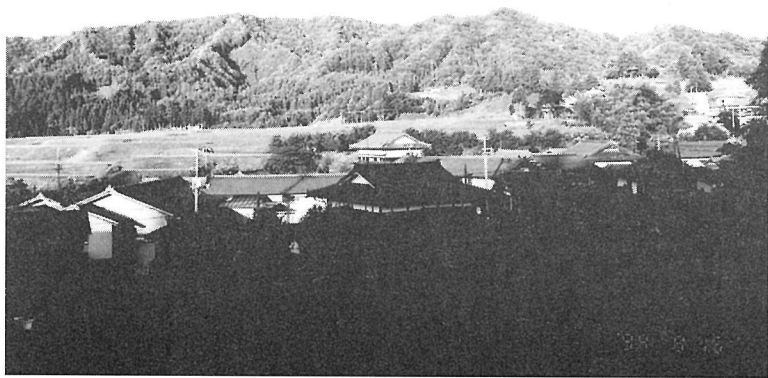


写真1 国道7号線バイパスより大毎の集落を望む。正面は東側の山塊。そのはるか向こうは山形県朝日村。

挟んで朝日村に接する山間の集落なのだが、山北町の中では一番米が取れるという。それも一番おいしい米なのだということ、山北町内のあちこちで聞いた。西側の低い山並みを越えればそこはすぐに日本海だ。冬の季節風は雪をたくさん運んでくる。水に困ることはないのだろう。春先にここら辺りを訪れたときの、家々の雪囲いを出す。

ここ数年で農林省の主導による圃場整備が完了して、田圃一枚々々は大きくなった。だが大毎は平野の集落ではない。川を挟んで東側に広がる緑の絨毯は、かなりの段差を持っている。いわゆる山田なのだ。その上に連なる低い山の奥にも田圃は広がっているという（写真1参照）。かつての農作業は大変だっただろう。大毎には嫁にやるという話も、他の集落ではあちこちで聞いた。

集落に入って佐藤久恵氏宅を訪ね、民謡調査の旨を伝える。昨年夏の探訪調査の際にお世話になっていて、話はスムーズに進んだ。元小学校の校長先生で、山北町では名の通った方だ。藤田徳太郎の『日本民謡論』（昭和十五年、萬里閣刊、民謡を学術的に研究した初めての書



写真3 旧出羽街道を行く子供神輿。

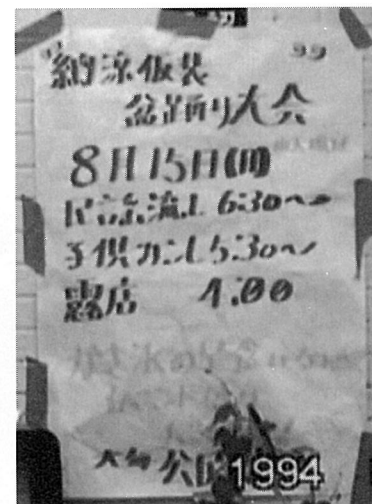


写真2 公民館のポスター。ービデオテープより。

と言っている)をお出しになって、昔お読みになられたことを控えめにお話しになる。山の中でゆかしい本に出逢ったものだ。

さて、盆踊りの予定のあらましを伺って、今度は渡辺サクさんのお宅を訪ねる。やはり昨年夏の調査で、大毎の盆踊り歌を歌っていたのだ。大きな家の玄関で案内を乞うたら、丁度浴衣に着替えていらっしやるところで、肌も露わな姿をお見かけして少々驚く。盆踊りの時は歌うからという声だけ聞いて、早々に退散する。

まだ夕暮れまでは時間がある。集落の中は静かだ。都会に出て行った人々が帰ってきていて、盆の期間だけは人口が倍くらいになっているはずだというのだが、実にひっそりとしている。ただ、盆踊りの会場となるお寺(如意山満願寺)の前だけが、賑やかだ。三十メートル四方ほどの狭い広場にしつらえられた櫓の上では、若者が太鼓の練習をしている。むろん、盆踊りの時に叩かれるのであろう。道路では綿飴の屋台などに使う発電機が唸っている。やはり若者達が屋台の準備をしているのだ。

集落のそここに、盆踊りを知らせる張り紙がある。そ

こには

「納涼仮装盆踊り大会 8月15日(月) 雨天順延
民謡流し 6:30 子供みこし 5:30 露店 4:00
かき氷の早食いなどイベント盛りたくさん 大毎公民館」

と書いてある(写真2参照)。かつて旧暦七月十三日から盆の期間、毎晩踊られて近隣に鳴り響いたという大毎の盆踊りは、現在は公民館の主催、それも一夜限りの催しなのであった。

なんだ、役所の主催なのか、と少々がっかりした。しかし、しばらくして四十歳そこそこの公民館長さん(本業は大毎の農家)と話して分かったことだが、ここの公民館(大毎集落開発センター)は、普通の自治体にあるような、社会教育の地域主体として機能すべく職員を常駐している、役所の出先機関ではなかったのだ。いわば昔の若者組や青年団の機能を引き継ぎつつ集落の紐帯の中心となる自治組織としての機能を果たそうとしているようであった。

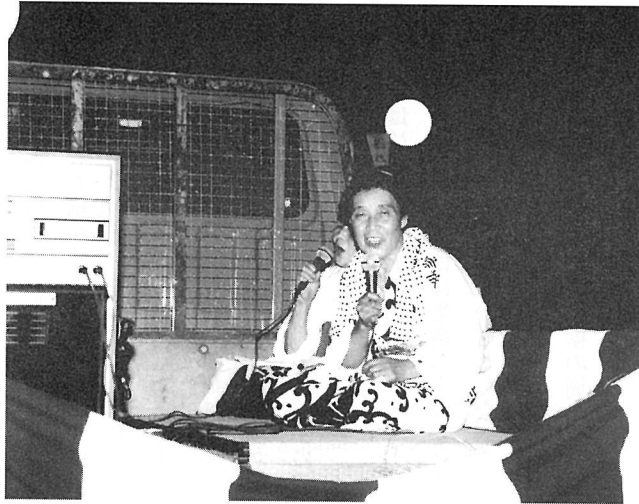


写真5 軽トラックに乗った民謡流しの歌い手。右側が渡辺サクさん（大正五年生）。

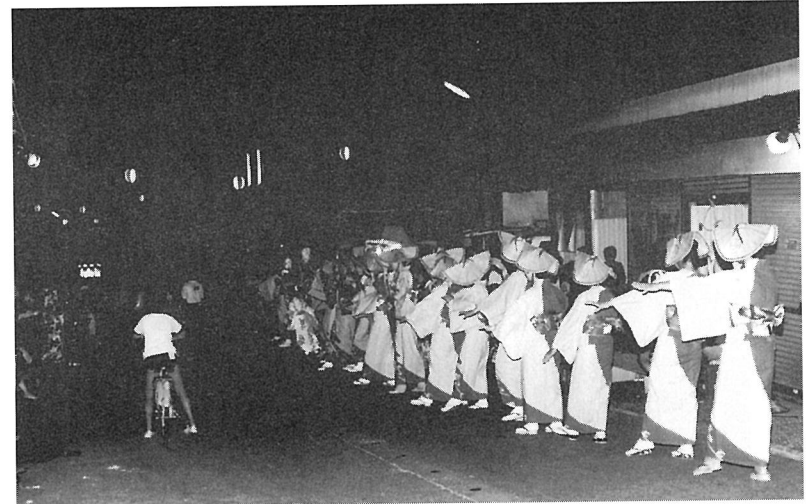


写真4 婦人会による民謡流し。大毎の集落の中心部。旧国道7号線である。

1の広い参画が企図されていたのである。それがこの張り紙に示されていたのだった。

日が暮れかかり、薄暗くなったなあと考えた頃、集落を貫いて通る旧国道七号線の坂道を下りながら、婦人会の民謡流しが始まった（写真4参照）。歌は「相馬盆歌」である。特にどの歌で踊るといことが決まっているわけではないそうであるが、ここ数年は「相馬盆歌」であるという鳥追い笠を被り、揃いの浴衣で一列に進んでいく有様は何やらゆかしい。祭礼行事における行列の意味とか、古い風流踊りの屏風絵などを持ち出して難しいことを考える前に、普段着の生活が行き交っていたはずの町の軒先を、数十人の女性が顔を深く笠の内に隠してうつむき加減で、しかも浴衣で踊り過ぎていく図は、日常を超えた空間がそこに現れ出しめられていることを感じさせずにはいられない。富山県八尾の風の盆でも、盛岡周辺で行われる盆踊りのさんさ踊りでも、いつも感じるのはそのことである。

驚いたのは、歌がレコード（CD）ではなかったことである。行列の先頭には軽トラックが拡声器と歌い手（おばあさん二人、一人は渡辺サクさん）を乗せてゆつくりと進

公民館というのは単に地元での通称に過ぎない。民謡流しも、子供みこしも、その他のイベントも、公民館の発案でここ数年の内に行われるようになったものやうだが、それは、集落の担い手からの自発的な動きなのであった。二百数十戸の集落の重要な行事としての盆踊りを、どうやって活性化させて行こうかという試みなのである。それは、決して集落の人々の心と離れたところで発案されたものではない。

そういえば、小学生以下の子供達が神輿をかついで、人通りのない出羽街道を行くのをさつき見たのだった（写真3参照）。なんで盆踊りの日に神輿が通るのだらうと、ちよつとした違和感を感じながら眺めていたのだったが、そういうわけだったのだ。中・高校生が露店やイベントの準備を手伝っている。お寺の前の数軒の露店は、いわゆるテキヤの店ではない。暗くなってから盆踊りの振舞酒（これは古くからの習慣のようだ）を配っていたのも彼らだった。それらを指揮し、行事の担い手の中核となるのは青年である。婦人会は民謡流しをして、盆踊りの始まりに興を添え、雰囲気盛り上げる。老若を問わない、集落の構成メンバ

んでいく（写真5参照）。「相馬盆歌」の伴奏（つまりカラオケ）を流しながら、歌だけはきちんと生の声で歌うのである。

全国的に有名な民謡で盆踊りをするときは、いわゆる民謡歌手の歌う、整った演奏をレコードで掛けて踊るというのが、どこでも見かける現代の盆踊りの風景だろう。昭和五十七年に訪れた、新潟県津南町でも、地元の古い盆踊りである「からす踊り」以外はレコードがかかっていたのを思い出す。あの鈴木牧之の『秋山紀行』に紹介された、信濃・越後国境にまたがってひっそりと息づく山村、秋山郷に由来する盆踊りでさえそうであったのだ。

前述したように、大毎の民謡流しは古くからの次第ではない。だが、こうやって新たに盆踊りの行事に組み込まれるときに、どこかに働いているなんらかの規制が生きるのだろう。わざわざ少し調子外れで、リズムも伴奏とずれてしまう生の声でせずとも、民謡歌手の歌う「相馬盆歌」を流せばよいのである。だが、そのようにはしないのだ。

踊り手は「嫁様（婦人会の若手）」が中心だという。振りも揃っていて、なかなか美しい。顔は笠に隠れて見えないが、狭い道の両側には集落の人々が並んで「ありやあどこそこの嫁だな」などと言いながら見ているから、嫁の披露の意味などもあるのかもしれない。

流しの列は盆踊りの会場である寺の広場へ練り込んでいく。もうあたりは真っ暗で、広場と露店の明かりだけが煌々と光っている。そのまま櫓の周りを囲んで行って輪を作る頃には、人々がずいぶん集まってきた。民謡流しの拡声器で流された「相馬盆歌」は盆踊りの開始を告げる合図にもなっているのだろう。その「声」に誘われて、人々が集まってきたように見えた。

ところが盆踊りはすぐには始まらなかった。「相馬盆歌」がやみ、踊りの輪がほどこけて一旦静かになると、始まったのは「イベント」である。子供向けには「かき氷早食い競争」大人向けには「ビールの早飲み競争」である。

ちゃんと賞品も出る。とても現代的な催しのようなだが、祭りにこんな一見馬鹿々々しいことが行われるのも、実は昔ながらの発想だ。地方のことはよく分からないが、江戸の記録を見れば、祭りに付随する、酒の早飲みくらべだの饅頭の早食いくらべだの、枚挙に暇がない。それで死者が出るほど過熱した「イベント」が多数行われている。

もちろんさすがに公民館の主催である大毎の盆踊りの「イベント」はそこまですることはない。「かき氷早食い競争」は急に食べ過ぎてお腹を壊さない程度の量の氷だし、「ビールの早飲み競争」はなんとストローで飲む競争であった。しかし、参加者にはいかにも参加した感動が得られるように、広場の隅には舞台がしつらえられ、照明に照り映えており、司会の青年が一人々々インタビューをしている。文明の利器というのは大した物で、少し離れたところから眺めていても、自己紹介をしている参加者の上気している様子などが、明るく浮かび上がり、マイクを通して伝わってくる。

「一人々々が祭りの主役になる」などという少々古びた表現があるが、光を浴びて紹介されること自体が、その場への積極的な参加の意思表示であると同時に、集まった地元の人々へのお披露目にもなっている。私と同行した妻も、公民館長さんに呼ばれて女性陣のビールの早飲み競争の舞台に上がらせられ、「今日初めて東京から来た飯島さん」と紹介されて、盛んに皆の拍手を受けた。

ところでこの時、他の若い女性達は「○○の嫁です」「○○のかあちゃんです」とみずから名乗った。○○の部分は屋号である。当然のごときこの名乗りは、もちろん共同体内での自分の位置づけが、個人を示すことになることを受けて入れていることである。

ああ、ここでは盆踊りの行事は、まだまだ共同体の共同行事の一つとして機能しているのだ。たとえここ数年の内に取り入れられた新しい行事であっても、そこに参加する人々は、たとえ若い人々であっても、共同体の紐帯を受け入れているのだ。もちろんそれを嫌って東京や新潟市へ出る若者も多いのだろう。ご他聞に洩れず、嫁不足だ



写真7 盆踊りの歌い手、男女二人ずつ。右から二人目が渡辺サクさん。



写真6 盆踊りの有様。如意山満願寺境内。

という話も聞いた。だが、このような山間の集落に残って暮らし続けている大毎の人々は、この共同体を我が社会として生きているのだ。そんな都会人的な感傷とも言える感動を覚える。

「イベント」が終わると、汐が引くように又静かになる。発電機の唸りと、あちこちに散らばって所在げな人々のかすかな話し声と…。

広場の入口には「豊年満作」と決まり文句が掲げられている。あちこちに「五穀豊穰」「家内安全」などの文字を浮かび上がらせた灯籠が立っている。電球ではなく、蠟燭の火に浮き立つその文字が、赤や青の絵の具に彩られてなつかしく揺らいでいた。

すると突然、櫓の上から太鼓の音が鳴り響きだした。盆踊りの始まりである。

格別に誰か司会者がいて、「これから盆踊りを始めます」などとアナウンスしたわけでもないが、人々がおずおずと輪を作り始める。気がつくと、仮装をした若者が先頭に立って輪を作り始めるのにつれて、浴衣の人も普段着の人も広場に出て踊り始めている。と同時に、渡辺サクさんの声

が高らかに上がったのだった。

ハーラー 十三日 二度あるならば 可愛い兄やさま
と ホンニ 二度逢おうナー

本当にどこでも民俗行事というものは、部外者にとっては何の前触れも無く始まる。それを案内がないといって怒ったり驚いたりしてしまうようなのである。それは地元共同体にとっては、当然の次第なのであり、分かっていることだからだ。外から来たものにとっては、目に見えないところで働いている、その共同体にとっての自明の論理を想像することを忘れてはいけない。

今日は十五日なのに十三日と歌うのは何故か。かつて大毎の盆踊りが旧暦七月の十三日から始まったことを、歌は記憶しているのである。かつて毎晩近隣から大勢の人々を集め股賑を極めたという、その賑わいに心惹かれ、毎年心待ちにする人々の想いが、ここには残っている。今では十五日たった一夜の、それも二時間もすれば終わってしまう行事に、そのような記憶がまず最初に表現されることで、

写真8 飛び入りの歌い手。佐藤久恵氏の奥さん、佐藤^{とも}知さん（昭和3年生）。

盆踊りは始まったのである。

歌が始まると、あつという間に櫓を囲む踊りの輪が二重三重、五重六重と増えていく（写真6参照）。どこにこんなに人がいたかと思わせるほどの人が、狭い広場を埋め尽くしていく。

マイクを通してはいるが、大毎の盆歌は、太鼓と音頭取りの声だけで歌われる。昔から大毎で歌われている歌だ。伴奏はない。それに合わせて輪踊りが粛々と続くのである。

音頭取りは老年の男女二名ずつ（写真7参照）。一応公民館から依頼するそうであるが、後から三名ほどの飛び入りもあった（写真8参照）。お酒も入っている気分の音頭取りが、交替しながら歌うのである。

盆歌の旋律は音頭取りによって多少違う（楽譜参照）。また、基本的には陽旋法の節回しだが、歌詞によって陰旋法でしか歌わないものもある。歌詞は基本的には七七五の近世調だが、一句目は五音になることがある。この時は旋律は短くなるのだが、歌い手には違和感がないようである。

歌詞の初めには必ず「ハーラー」という歌い出しがつく。

また二句目の途中には「コラ」とか「コリヤ」という言葉が挿入されることもある。三句目の「ヤ」、四句目の「ホンニ」「ナンダ」「姉コ」「兄ヤサ」も同様である。その他に各句の間には、踊りの中から「ドッコイドッコイ」とか「ドーシタドーシタ」などの囃子言葉が掛かることがある。踊りが興に乗ってきたり、音頭取りが歌詞に詰まったり、交替がうまくいかずに太鼓だけの時間が続くと、こうした囃子言葉が掛かることが多い。

結果として、大毎の盆踊りに歌われる盆歌は、歌い手が違うと旋律が違ってくるし、歌詞が違ってくるのも同様である。音楽的に子細に検討すればとても同一の曲とは言えないほどの違いが存在するのだが、しかし実際はどれも大毎の盆歌なのである。ごく民俗的な、節回しや旋律に対する考え方をここに見ることが出来るだろう。

盆歌の一詞句（一番）を歌うのに約三十秒ほど掛かる。続けて歌えば、十分で十七から二十詞句ほどである。この夜は一時間四十分ほど歌い続けられたから、二百詞句近い盆歌がえんえんと歌い続けられたのであった。

実際には同じ歌詞が何度も出現しているし、聞き取りが出来なかったものもある。しかし同一と思われる歌詞が微妙に言い換えられて歌われている場合もあった。まったく同一の歌詞は除いて、聞き取りが出来た歌詞を歌われた順に並べてみよう。踊り子の囃子言葉は省いてある。

ハーラー そろたそろたよ 踊り子がコリヤそろた 稲の出揃いより ホンニなおそろた
 ハーラー サンショの木 姉コだとコラおもた しっかり抱きしめたよ ホンニふみたてた
 ハーラー 十三日 二度あるならば 可愛い兄ヤさまと ホンニ二度逢おうな
 ハーラー 兄ヤさまと いつ逢うたまだ 忘れしましたよ ホンニ月も日も
 ハーラー 盆だつてがんに 踊り衣装持たぬ 篠の葉でも着て 兄ヤさがさもそと
 ハーラー おらの若いときや 十六七の頃 天上飛ぶ鳥 ナンダ迷わせた

ハーラー 兄やさまは いつ来てみても 振り鉢巻きなど ホンニ頬被り
 ハーラー 通うて来るなら 麻裏草履 下駄は二の字ヤの 兄ヤサ跡がつく
 ハーラー かわい姉コヤと いつ逢うたままに 忘れましたよ ナンダ月も日も
 ハーラー 大工さんより 木挽き坊がコリヤ憎い 仲の良い木を ナンダ引き離す
 ハーラー 月は重なる 身は重くなる 兄ヤサ情けが ナンダ薄くなる
 ハーラー 兄やさまの 声とヤコラ聞けば つのる身燃やすと 姉コ気がねたむ
 ハーラー 来るか来るかやと 川下見れば 川原柳ヤの 姉コ影ばかり
 ハーラー 風に便りを 越すなよ兄ヤサ 風はふらふら ホンニ吹き足らず
 ハーラー 皆様 御苦労やでござる 御苦労ながらヤも ホラサ踊ってくれ
 ハーラー 歌の先生も おるかしらぬ 一つ歌いましよ ホンニふしなしよ
 ハーラー さんしゅの木 姉コだとコラ思て しっかり抱きしめたきや 兄ヤサくぎたてた
 ハーラー 庭の前の はつの木が枯れた 兄ヤサ泣き泣き ホンニ来てくれろ
 ハーラー どうせ来るなら 七つもコリヤ八つも 一つ二つは ナンダ鼻汚し
 ハーラー 通うて来たのに この戸が開かぬ 下手な大工ヤの ナンダ釘違い
 ハーラー 通た通たよ 七晩コラ八晩 堅いあまだよ ナンダ帯解かぬ
 ハーラー そろたそろたよ 踊り子がコラそろた 稲の出揃いよりホンニもろ揃た
 ハーラー 来るか来るかやと 川下コラ見れば 川原柳ヤの 兄ヤサの影ばかり
 ハーラー 恋に焦がれて 鳴く蟬よりも 鳴かぬ蛩が ホンニ身を焦がす
 ハーラー 遠く離れて 逢いたい時は 月が鏡に ホンニなればよい

ハーラー 盆の十三日 正月からコリヤ待ちた 待ちた十三日ヤ 姉コまた来たぞ
 ハーラー 俺とお前は 羽織のコリヤ紐さ かたくたたんで 姉コ胸に抱く
 ハーラー おらも若いときヤ 二十二三の頃 天上飛ぶ鳥 姉コ迷わせた
 ハーラー 行ぐちや来いっちゃで 二度だまされた また来いさやで 姉コだまされた
 ハーラー 今夜遅くとも 行くかもしれぬ 雨戸細めて 姉コ開けておけ
 ハーラー 今宵一夜は 浦島コリヤ太郎 あけて悔しや ナンダ玉手箱
 ハーラー 盆だつてがんに なすの皮の雑炊だ あまりてんこもりで 兄ヤサ鼻焼いた
 ハーラー 声が出ない時ヤ 馬のケツこら舐めろ 馬のケツから ナンダ声が出る
 ハーラー わしと兄やさまは 羽織の紐と しつかり結んで 兄ヤサ胸に置く
 ハーラー 兄やさまより 太鼓打ちヤ可愛い 鳴らぬ太鼓ヤを ホンニなれなれと
 ハーラー 太鼓叩きややれ 世間の人に 太鼓ないかやと 兄ヤサ思われる
 ハーラー 千両万両の 晴れ着ははれが 可愛い兄やさまの 姉コ手に触れた
 ハーラー 行ぐちや来いちゃで 二度だまされた また来いっちゃやで 姉コだまされる
 ハーラー 月の出端にと 約束したが 月ははや出たよ ホンニ森の影
 ハーラー 俺とお前は 羽織のコラ紐だ かたく結んで 姉コ胸に抱く
 ハーラー 行ぐちや来いっちゃで 二度だまされた また来いちゃゆうて 姉コだまされる
 ハーラー 寺の前の さんしゅの木ヤコラ枯れた 坊主は泣き泣き ナンダ水掛けた
 ハーラー 俺とお前は 羽織の紐だ かたく結んで ホンニ胸に抱く
 ハーラー 切れた草鞋を 粗末にコリヤするな お米こさえた ナンダ親だもの

ハーラー 出せ出せ 出さねばコリヤ破る 娘出さねばナンダ壁破る
 ハーラー 庭の前の さんしよの木ヤコラ枯れる 兄ヤサ泣き泣き ナンダ水掛ける
 ハーラー 親の異見と なすびのコラ花と 千に一つの 兄ヤサ無駄もない
 ハーラー 太鼓打ちヤ 兄ヤさより可愛い 鳴らぬ太鼓ヤを ホンニなれなれと
 ハーラー 通て来たのに この戸が開かぬ 下手な大工ヤの 兄ヤサ釘違い
 ハーラー 踊り踊るなら しなよく踊れ しなのよい子ヤは ホンニ目にとまる
 ハーラー 遠く離れて 逢いたいコラ時は 月が鏡ヤと ナンダなればよい
 ハーラー 昔思えば 泣くだけくやし 泣くのいとうなら ホンニ繰り返す
 ハーラー 今年ヤ豊年だよ 穂に穂が垂れて 道の小草にも 姉コ米がなる
 ハーラー 道の小草に 米なる時は 山のきかには 兄ヤサ金がなる
 ハーラー 思うて通えば 千里も一里 逢わず帰れば ホンニほどつてみる
 ハーラー おどりやどっこいぶだ 太鼓早めに叩け 遅いことなら ナンダ汽車で来る
 ハーラー 部屋の前さ さんしよの木ヤコラ枯れる 兄ヤサ泣き泣き ナンダ水掛ける
 ハーラー 嫁をもらわば みめかたちよき 今宵夫婦で コリヤ歌上手
 ハーラー うれしはずかし 踊りもいつか そつと手を出す コリヤ盆踊り
 ハーラー おもて通えば 千里も一里 逢わず帰れば 兄ヤサもどつてくる
 ハーラー かよたかよたよ 七晩かよた 堅い女よ ナンダ帯解かぬ
 ハーラー おれとあんたは 羽織の紐だ かたく結んで 姉コ帯解かぬ
 ハーラー 盆の十三日 正月からコラ待つてた 待つてた十三日 姉コ後になる

ハーラー 俺と逢いたいなら とよの水コラ止めれ 水が止まったヤと 兄ヤサ出て逢おうよ

他に聞き取りが出来なかつた歌詞が二十ほどあったから、この晩の盆踊りに歌われた歌詞は約八十種類ほどにもなつたろうか。昔はもつと長い時間歌つていたというから、大変な数になる。むろん、中には左のように一見大同小異の替え歌のようにしか見えないものも多数含まれている。

ハーラー 俺とお前は 羽織のコリヤ紐さ かたくたたんで 姉コ胸に抱く
 ハーラー わしと兄ヤさまは 羽織の紐と しつかり結んで 兄ヤサ胸に置く
 ハーラー 俺とお前は 羽織のコラ紐だ かたく結んで 姉コ胸に抱く
 ハーラー 俺とお前は 羽織の紐だ かたく結んで ホンニ胸に抱く
 ハーラー おれとあんたは 羽織の紐だ かたく結んで 姉コ帯解かぬ

「わしとお前は羽織の紐よ、固く結んで胸に置く」というのが、いわば元歌で、有名な都々逸の文句として古くから知られている。しかしそれをもつて典型とし、あとは水増しの歌詞などと上滑りな理解をしてはならない。注意深く読めば、この「替え歌」群が男女の掛け合い歌になっていることがよく分かるだろう。「羽織の紐」という表現を中心として男女各々の立場からの歌い換えが微妙になされている。その結果として「かたく」という語の意味は「結び目の固さ」から互いの心情的結びつきを表象していたものが、女性の心のかたくなさの表象へと転換させられている。

同じ旋律と同じ振りを延々と繰り返す、どこにでもあるような盆踊りだけれど、これだけの言語表現の開花があ

るのだ。そしてその繰り返しと、右のような微妙な変化が、伝承と伝播の秘密に関わってくるのだろう。

狭い広場に組まれた櫓のまわりの踊りの輪は、はじめは一重であったのが、時間が経つにつれて三重四重になっていく。そして知らぬ間に広場は二、三百人の人で埋まっている。ほんの四、五歳から八十過ぎのお年寄りまで輪を作っている。盆歌はとぎれることなく続き、踊りは太鼓に合わせて単純な振りを繰り返す。

耳に入った「恋に焦がれて鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす」という歌詞は、古く『山家鳥虫歌』（明和九年1772刊、写本類は「諸国盆踊乃唱歌」等と題す）に「山城国風」として収められているものだ。その頃からか、あるいはそれ以前からこの大毎で歌われているのかどうかは分からないけれど、表現伝統という点から言えば『古今集』までさかのぼる、由緒のある歌詞であることは確かである。

今更言うまでもないのだが、日本各地の山の隈々、川のほとり、森の木陰、波打ち際、暗闇の辻々等で伝統的な盆踊り歌はまだ歌われている。いや盆踊りに限ったことではない。色々な行事・祭礼・儀式には、古い由緒を持つウタが、まだまだいくらかでも歌われているのだ。むろん歌い手は大抵無意識である。だが、それらは間違えなく日本の表現伝統であり、祖先の積み上げ、鍛え上げてきた文化遺産なのである。ただ我々がそれを忘れてしまっているだけなのだ。

右の「羽織の紐」も「恋に焦がれて」もそうだが、これらの歌詞の内容はほとんどが恋を歌っている。恋と言うよりも、もっと直截的な誘いかけと、夜這いのウタだ。そしてそれらは決して男性側からのみの表現とはなっていない。男女双方からの問い掛けになっているのである。それを端的に表しているのが「姉コ」「兄ヤサ」という呼び掛けの言葉だろう。それは歌詞の一部として用いられたり、時には囃子言葉のように使われるのだが、「姉コ」とあればそれは男性からの問い掛けの歌詞であり、「兄ヤサ」とあれば女性からの表現となるのである。

実際に男女二人ずつの音頭取り（公民館が依頼するという）は、ほぼそのように歌い分けていた。男は男のウタ

を歌い、女は女のウタを歌う。それは互いに恋の歌い掛けをするためであった。盆踊りの場を支配する歌謡表現の規制力は、ここでも恋を生み成就させる方角へ向かっていたのである。

そうか、そのために音頭取りは男女二人ずつが用意されていたのだ。盆踊りの準備をする側も、それを分かっているのかいないのか、当然の如くに男女の音頭取りを用意するのだ。

しかし、もちろん盆踊りの場がまったく「恋の場」であるわけではない。子供から年寄りまでの世代が集うその場で、恋の炎に胸を焦がすような、あるいはウタの内容が痛切に胸に響くような状況に陥っている男女が、一体どれほどいるというのだろうか。かつては沢山の若者が集ったに違いないとしても、音頭取りは彼らに向かってだけウタを歌ったのか。いや、そうではないはずだ。それはたとえば左のような歌詞が、表面上は恋のやりとりでありながら、現実には久しぶりに帰郷した家族に向けた表現としても成立することを見ればよく分かる。

ハーラー 十三日 二度あるならば 可愛い兄ヤさと ホンニ二度逢おうな

ハーラー 兄ヤさと いつ逢うたまだ 忘れしましたよ ホン二月も日も

ハーラー かわいい姉コやと いつ逢うたまだに 忘れしましたよ ナンダ月も日も

いや、すべての恋歌は、男女が互いに求め合うその心情を切実にまた美しく歌うと同時に、人と人が互いに求め合い結びつく、その関わりへの希求を表現しているのである。

つまり、膨大で様々な歌詞において、「七七七五」という音数律は表現の骨格として存在して言葉を支え、言葉と旋律による表現は美しく、時に切なく、あるいは滑稽に恋の心情を表象していることは確かだが、しかし間に挟まれる「姉コ」「兄ヤサ」という語は、単なる囃子言葉に見えて、実は盆踊りの「場」に集う人々全てへの呼

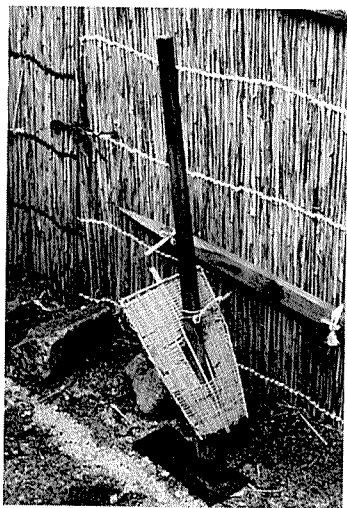


写真 9 田小切りに用いられた鍬と竹製のテンデラ。小俣地区、田宮トモ子さん宅にて。

びかけの言葉として機能しており、実はその呼び掛け自体に表現の本質が宿されていると言っている。一年の内で限られた機会である、心浮き立つ盆踊りという「場」に集う人々それぞれが持つ「関わりへの希求」へ呼びかけているのだ。

だが、盆歌を歌う音頭取りだけが、このような「ウタの力」を意識しているのではない。太鼓に合わせて、黙々と踊りに専念しているように見える踊り子達も、実はウタを良く聴き、それを受け止めていた。^(注3)

大毎の盆踊りの振りは、実は太鼓に合わせている。それゆえウタの旋律が短くなろうと、音頭取りの声が途切れても、太鼓が鳴っていれば踊るのである。ところが、この太鼓を打つ速度が一定していないと実に踊りにくい。しかし太鼓の打ち手も五十分と打ち続けていると疲れてくる。交替しながら打つのだが、おのずと上手下手もある。音頭取りはこの様子をよく見ている。太鼓が遅れて踊りにくそうだと見ると、太鼓打ちをからかう歌詞を歌い、その遅れを取り戻そうとする。音頭取りは只の歌い手ではないのである。盆踊りの進行の上で重要な役割を果たしているのだ。公民館長さんも「歌がうまいからといって誰でも頼めるわけではない」と言っていた。

音頭とは本来雅楽用語である。楽曲全体の進行を見ながらまとめていく、パート毎の指揮者のような存在だ。近世初期になって現れる石引・木遣り・地形などの音頭の責任はもっと重大で、歌によってその日の仕事の進み具合が決まった。盆踊りの音頭として例外ではない。

それにしても盆踊りもたけなわとなり、どうにも太鼓が疲れて遅くなり、ずいぶん踊りにくくなった頃に出た、「太鼓早めに叩け」という至極直截的な歌詞を聴いた踊り子達は、皆一斉に笑い声を上げたのであった。

これには驚いた。マイクで響く歌声が、盆踊りのBGMのように延々と流れるもののごとき感覚でいた私には、それまで黙々と、しかし一様に楽しそうな笑顔で踊っていた子供から年寄りまでの何百人もの踊り子が突然一緒に笑ったこの出来事が、とても意外に思えたのである。音頭取りは確かに歌で色々な表現をしている。しかし、踊り

子は歌が無くとも、肅々と踊っていたではないか。太鼓があれば踊れるのではなかったか。

しかし実はその場にいた踊り子達は皆、歌の文句をよく聴いていたのだ。音頭取りの掛け合いも、微妙な歌い替えも、実は良く聴いていて、黙って一人一人の胸の中で味わっていたのだ。そうやって、共同体の文芸伝統は共有されてきたのだ。たとえみずからはウタを歌おうとはしない人であっても、盆踊りの期間中毎日、毎年、繰り返し耳にしている内に、その表現の幾らかでも、自分のものにはなっただであらう。

まして大毎を中心とする旧出羽街道沿いの集落では、以前は「田小切り」の作業にこのウタを歌った。「田小切り」は東北地方の一部に固有の田作業で、田起こしに続いて、水を引いた田圃でまだ固まりになっている土塊（前年の稲株が固まっている）を鍬で小さく切っていく（小切る、株切りとも言う）のであった。雪が多く春の遅いこの地方で、早く土を軟らかくし、古株を腐らせ、出来るだけ早い時期に田植えをする方策であったのだろう。まだ雪解けから間のない冷たい水の中に入って、テンデラという泥除け（写

真9参照)を付けた鋏をふるって朝から晩まで稲株を切るのは、主に女のする辛い作業だったという。ウタを歌えば間違はなく作業がはかどる。積極的に聴き覚える必要もあったのだ。

今は「田小切り」の作業もなくなった。労働の場で繰り返し盆歌を歌う機会などすでない。今の音頭取りは盆歌で調子を取った「田小切り」を経験しているが、その子供の世代はもうそれを知らない。大毎の盆歌は、もう盆踊りの場でしか聴くことが出来ないのだ。しかも、昔は七日盆(八月七日)、盆(八月十三、十七日)、二十日盆(八月二十日)、裏盆(八月二十七日)、八朔(九月一日)と、旧盆の期間中に何日も行われた盆踊りは、いまは八月十五日の一日だけである。

大毎の盆踊りは午後九時少し前に終わった。人出はさっと引いたが、若者たちや子どもたちの仮装、上手だった踊り手たちに対して、公民館から賞品が贈られている。別に仮装していたわけではないが、初めての盆踊りに興じていた妻も審査員特別賞というのをいただいて嬉しそうであった。遠来の客に対してのせめてものもてなしということであろう。有難いことである。

私はと言えば、暑くて大汗をかいての取材・観察をしていたところへかなりの振舞酒をいただいて、ほろ酔い機嫌になりながら、とつぷり闇に包まれた大毎の集落を後にしたのであった。

注一 『新潟県の民謡』(昭和六十一年、新潟県教育委員会)には、山北町の一番奥の集落である雷地区のものなど数曲を載せるに過ぎない。『新潟県岩船郡山北町民謡調査報告書』(國學院大學歌謡研究会編、平成七年)には平成五、六年の民俗歌謡調査の結果がまとめられている。のべ百三十曲近い民俗歌謡が採集された。山北町は周辺の他の地域と比して、

比較的民俗歌謡の盛んな地域と言える。筆者もこの調査に参加したのであった。本稿の骨格は同報告書に掲載したものがそれを大幅に加筆・改稿し、写真・楽譜を添付して再呈するものである。

注二 飯島みほ「作業歌の変容―新潟県岩船郡山北町の田小切り歌を事例として―」(『日本歌謡研究』第三十四号、平成六年十二月)参照。

注三 ウタの「場」の問題については拙稿「ウタの自立―『梁塵秘抄』第四五七番歌から―」(『梁塵研究と資料』第十号、中世歌謡研究会、平成四年十二月)及び「和歌と歌謡をつなぐもの―音楽的側面から―」(『國文學―解釈と教材の研究―』第四五卷一四号、學燈社、平成十二年十二月)参照。